



9
4193



女今川

女子習状

智月三道の文

女義の母書と幼る文

女代女四民の文

新 女古状 搦園生竹

愚問寺教の母云教生の集

千代能飲求澤去の文

女七情の教訓

女兄弟姉妹の同論る文

園生草本も二系より 培養をこつては延新態も正く
 時小養ふては暖寒り人の眼と悦む公のまにすいさるを
 く移りやみてみるもうるはく 竟え代枯れて天然哉

待は姫侍茶れ育ちも教訓あれを行儀も正く孝り
 貞烈の人とる来を来候ふむとるれを候も頑小
 一くまのまねかち親族の名をを汚れ今此又
 とされうづのそえもかなぐさくそつり合せ
 生とられあるんて紙表つ女古状園生の竹と題
 さるものありと

文政壬午仲秋

高蘭山公將述

子の成長ふとてか父母の教
 野要へ母親まよのむふあやと
 いづとてても父母はけむ
 折檻せらまんとといひ母も
 ろも父にばさくさくも
 ち終らへ悪事とさうさう
 のとやと道とさうさう
 父にけあつてふ能く
 ろにべーよくあるも
 親のまつけがう父母の
 の智と夢想玉師の秋ふ
 父は母にいてあられ
 ろもんこ子やわい
 父のうたてさるい
 ゆへ唐土孟子の母二程子の母
 さいそそがうふ大賢
 人とまりせに傳人いふ



密かに道たるゆへ天知
 地知我知人知これを四知と云
 君子は其独とほむといひ
 又これさうあつていふ
 うすうあつてあつていふ
 か一人の足さるを戒め
 の同ざるを思ふ
 いふの語信言不煩不耳有
 石にはあつていふ人
 ある師へ又まうと思ふ
 てもくも人ふまうはつ
 ふう人ふまうはつ
 古今集の秋ふれより
 人もるに哀とさう
 りしはるうねばさう
 らふうまはるうねば
 理はまうなり



寒き書画の四ハ男女も
 嗜むと云ふといふうちふりの書
 との繪より一日もやぐべしと
 けつさりのみへに婦女専ら
 図基とてあそびここと
 少て源氏物語もやぐの巻
 なるふりやうといふ書画なる名
 ある婦女は古も今も多し又
 わが我玉のなれをなぐ
 下茶湯連飲能なるを風
 流ふかからもよとてとて女
 の道不坊ありやんとあそび
 とあれしやぬふてのやむの
 にふり傾いこのむべきやあう
 け鄭声いやとされたりと
 とがひを貞のこふとる行ひ
 るやとけとるなり



男の山に河ふのまれば
 る女は休まらずとれ父母
 舅姑夫の言ふ朝夕をどか
 せぬのめをむむとてまを双
 六貝屋合合合合草草し
 十粒香原平香花月事うぬ
 びるさの拂負とてじとて
 るふい他合れにさるれ勝と
 らふいふふとるなる顔と
 恨いさどやのあふと食も
 ちふふと錢とてあそびふ
 るふと成る一筋たはた入て
 けび負れに影のあふと河の
 あじふとするふののまび
 何る親をたも興とてとゆれ
 りのうとさうとさぬの女あうと
 由あくとさうとさうとさうと

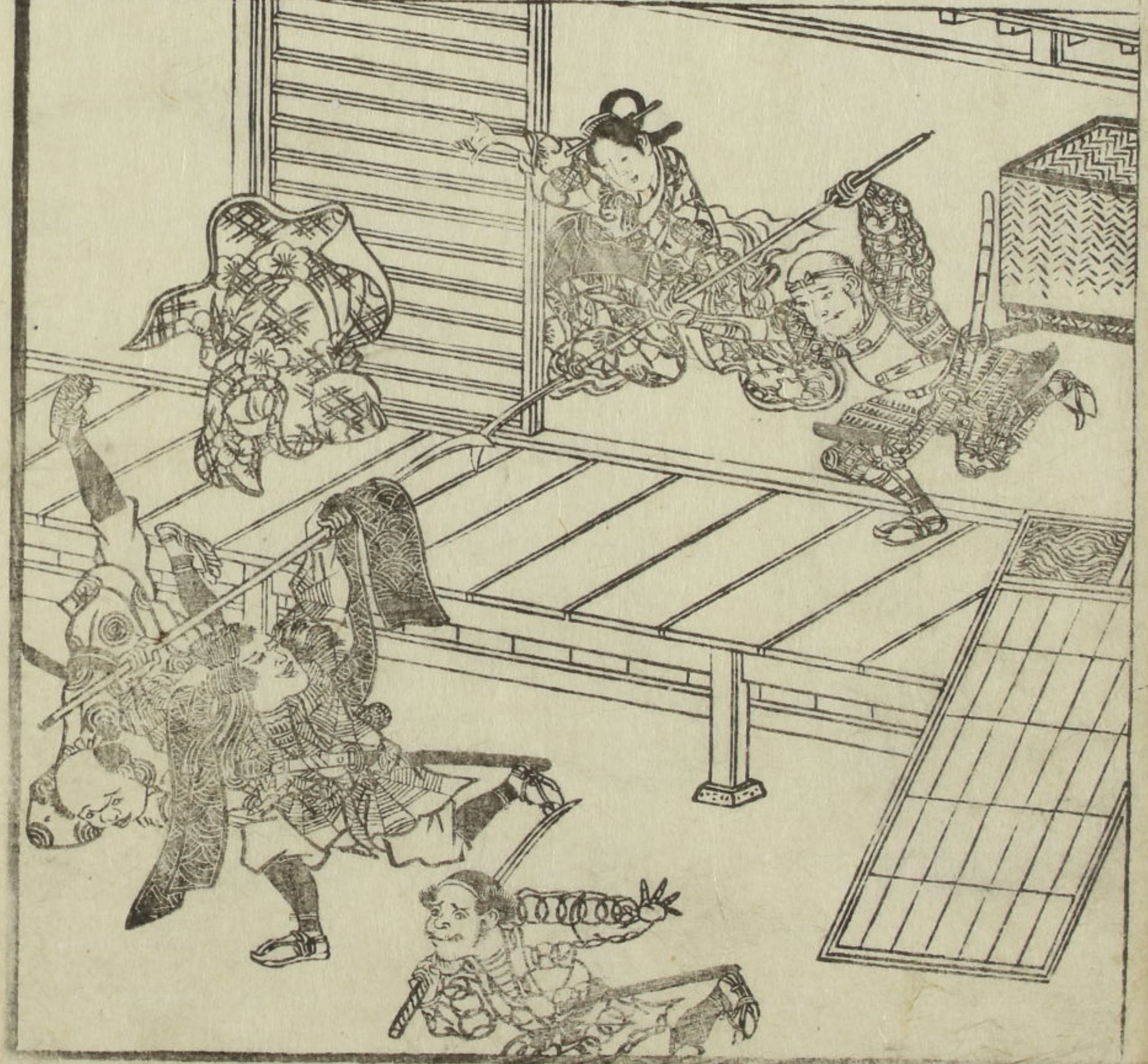


A black and white woodblock print illustration of a woman in a kimono sitting on a tatami floor, holding a fan. She is surrounded by a large, patterned cloth or rug. The scene is set within a traditional Japanese building with a lattice screen and a pine branch in the foreground.

A black and white woodblock print illustration depicting a scene in a Japanese garden. Three women are the central figures. One woman stands in the middle ground, holding a large, open fan with a complex pattern. She is dressed in a kimono with a wide, patterned obi. To her left, another woman is seated on a wooden veranda, looking towards the standing woman. To the right, a third woman is seated, leaning forward and looking down at something in her hands. The veranda is bordered by a low wooden railing. In the foreground, a curved wooden fence or railing runs across the frame. To the right of the veranda, a patterned cloth or garment lies on the ground. The background shows a garden with various plants, including what appears to be a pine tree and some flowering plants. The overall style is characteristic of Edo-period Japanese art, with clean lines and a focus on narrative.

A black and white woodblock print illustration from a Japanese book. It depicts a scene with a large wooden cart or carriage. Two men are seated inside the cart; one is looking out, and the other is looking down. A woman is seated on the ground in front of the cart, looking up at it. The cart has a large wheel and a small window. The background shows a fence and some foliage.

山名豊國入道法中様との
 結ぶる夜ぬき人殺し人を
 ひまじつには夜ぬき人の
 防ぎ我ひるふもまきまき
 ふられぬては密内ふのふどろ
 衣腹とぬきぬき人のを刀
 尖尾刀ふあけ投ぬきけれ
 る衣ふまきとぬきぬき人
 ううの物とぬきぬき法中
 大不利とぬき盗人をふけり
 近くとぬきぬきかひきま
 づきてまびつ助命とぬき
 ける時ふとぬきの女智と皆
 威しあるとぬきぬきの難ふ
 處とぬきぬきのぬきぬき
 ふとぬきぬきぬきぬき
 にうき



近江と美濃は豊前ととも
 りて國と隣りては境の村とあて
 みふれとぬきぬきぬきぬき
 當ひする更風味もぬきぬき
 美濃とぬきぬきぬきぬき
 七ふふとぬきぬきぬきぬき
 切ふぬきぬきぬきぬきぬき
 うふとぬきぬきぬきぬき
 とぬきぬきぬきぬきぬき
 されぬ美濃の豊前とぬきぬき
 うふとぬきぬきぬきぬき
 ちとぬきぬきぬきぬきぬき
 にふふとぬきぬきぬきぬき
 多めとぬきぬきぬきぬき
 会ふとぬきぬきぬきぬき
 夫もぬきぬきぬきぬき
 一とぬきぬきぬきぬき



世俗小丙午の女をいふことゝ思
丙午陽火午南方の火より火不
火と云ふるをよりいふるゝゝ
日の本風の雨で陳中病家病
登綱船中いふ小島何ありた
去る天明二丙午年不日今中
不誕生で女は約十万人ある
へや要る方々いふゝ寡位
或は尼に帰るもいふゝいふゝ
いふゝは運天あり妖人耳
術をいふゝのいふゝいふゝ
東家の西の面をいふゝいふゝ
已に完より鬼つといふゝいふゝ
其他の宅より鬼門ありゝゝ
ん古飲ふ
いふゝいふゝいふゝいふゝ
いふゝいふゝいふゝいふゝ



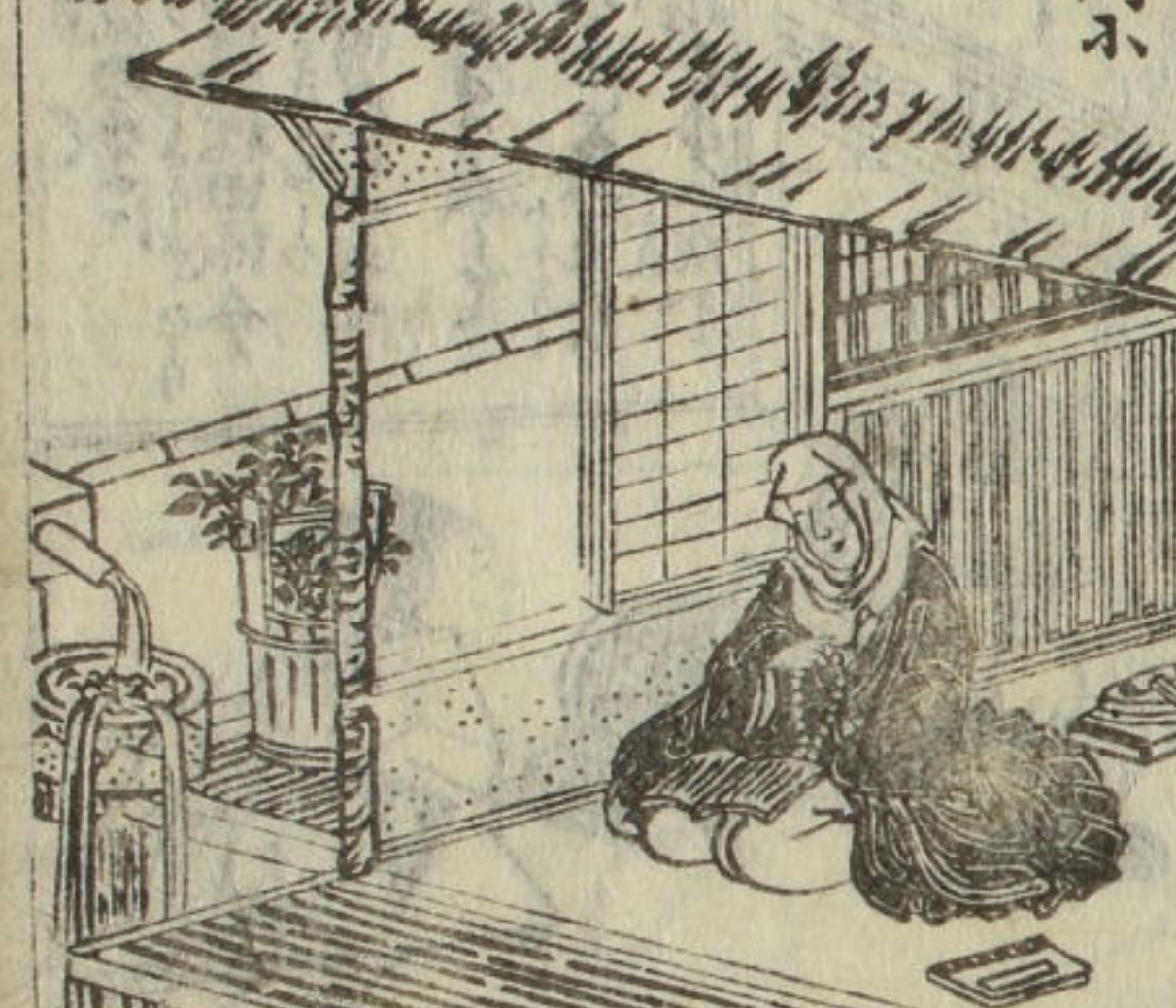
女古状傳略者

いふ今川状なりと今川伊藤守貞世入道
不後九段の掬影殿よりいふ子息仲秋
いふゝの状ありいふゝいふゝいふゝ
書するものいふ人いふゝいふゝいふゝ
知るゝ女子いふゝいふゝいふゝいふゝ
習状いふゝいふゝいふゝいふゝいふゝ
いふゝいふゝいふゝいふゝいふゝいふゝ
いふゝいふゝいふゝいふゝいふゝいふゝ

ね我が母の連帳乃乃乃乃乃
凡流いふゝいふゝいふゝいふゝ
其子お我いふゝいふゝいふゝ
家通いふゝいふゝいふゝいふゝ
いふゝいふゝいふゝいふゝいふゝ
いふゝいふゝいふゝいふゝいふゝ



智月いふゝいふゝいふゝいふゝ
住いふゝいふゝいふゝいふゝ
いふゝいふゝいふゝいふゝ
いふゝいふゝいふゝいふゝ
いふゝいふゝいふゝいふゝ
いふゝいふゝいふゝいふゝ



お代女いふゝいふゝいふゝいふゝ
於通いふゝいふゝいふゝいふゝ
いふゝいふゝいふゝいふゝいふゝ
いふゝいふゝいふゝいふゝいふゝ
いふゝいふゝいふゝいふゝいふゝ
いふゝいふゝいふゝいふゝいふゝ



A black and white woodblock print illustration of a woman in a kimono sitting on a tatami floor, playing a shamisen. A low table and a small box are also visible.

いま
かい
あそ
う
う

禁む割詞の榮いまい せい けうく

つね
これ志が海く

女の乃々あき々々

[illegible]

人の中を幾人もの
 然るを以て所を求む
 衣類を乞ふに必らず
 貴も賤も法あるを

ふみきほを好む
人の非をおあわむを
知あるをよしとす
出ぬゆへに對面を
いふ側をくわたり

うきく生うまと
しどもあひせんと
なりわくひと
かき事こと
なりあひと

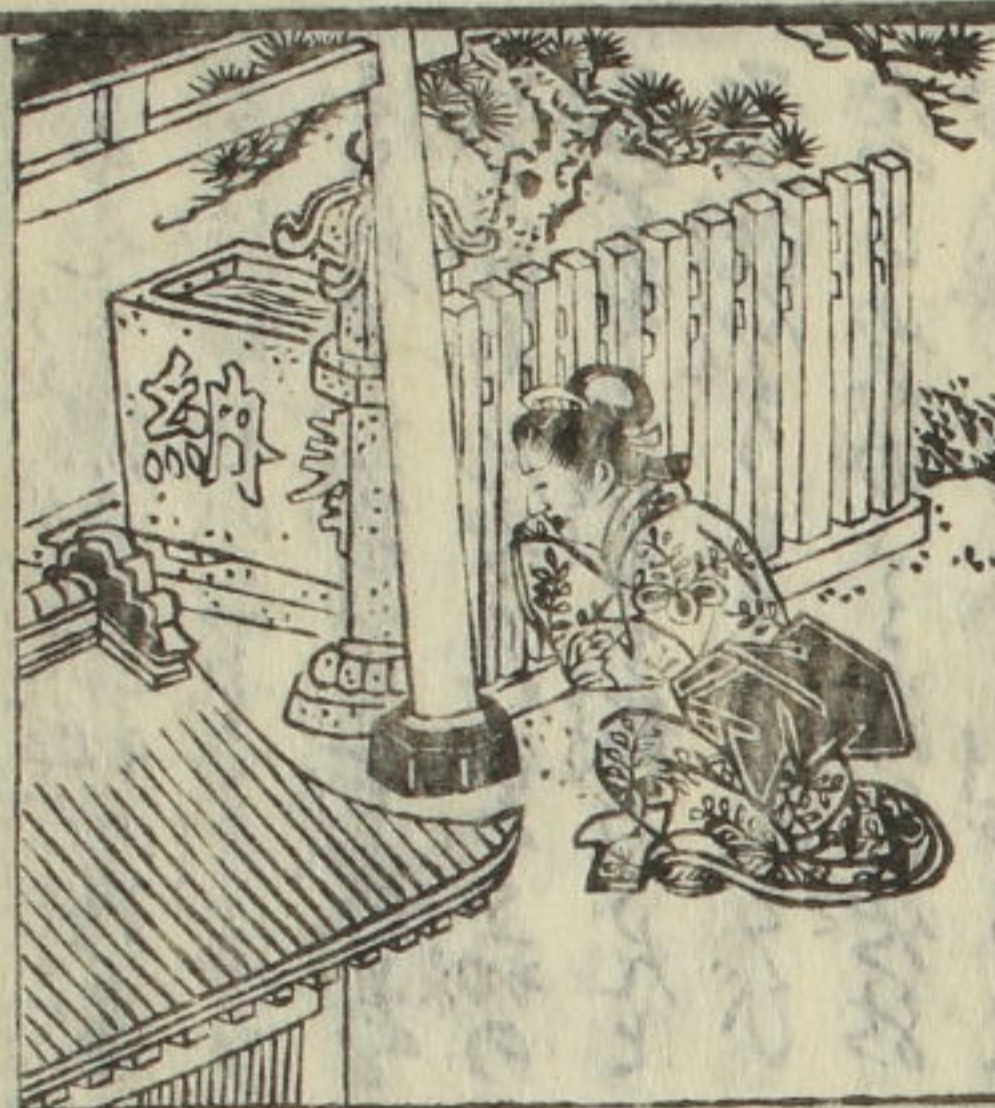
よふべし男子や
 師とるを男と修る
 道哉
 あれといへども女と
 しへば学ばず

珠とぬぐとぬぐと
歌とぬぐとぬぐと
歌とぬぐとぬぐと
歌とぬぐとぬぐと
歌とぬぐとぬぐと

意なりん我心正
 うけと知今
 人を正法よと目
 月の弟木國去を
 照るふとくん然

おとこおや子ハ父ハ
 やとハ早レ親ハ老
 衆ハ持子ノ親ト哺
 食ハ文字ハ
 書ハ留美ハ

宝は山も金も
とんねんを
用を成を
事なり我宅は
学を成を

[illegible]

第九十大吉

一心向天飛

秦川舟自歸

前途成好事

應得貴人推

まゐるといふことありあり
バツいふてんつらじや
しん志ゆつせのときこゝあ
ふべしとなり

せんせんのおまはあやふ
しきをつむといふこと
あり天のめくらふてこと
さうなることへなり

らうととはふこと
りすふておい
よきことかづくべし
となり

それよりめうへの人の
力をうつれてしん
せんやうのちひ
をひくあり

△けとくにあふ人は心ままたとあ
りてるをまわすことしん
のかうないかくばせんめくらを
つてきふんのちうちをかきつるしん
ふるづのぞくしんないむのちなる
べしことろさうふるからなること
はらちちちちちひさなるべし△
んみんふに△ふるふるふる
△まぢびとまぢる△そしやうと
かぢふ△のぞくするふ△うせの
のいづる△うせりひとも利あり△
るづりるさしけんふるふめと
むことろ人をうつるたひまふ
は△生現はいきる

賞状を奉呈すに
 願ひ親睦の称賛
 せむ詩の巻乃の
 うる名末代の面
 是ぞ存乃ふかきと

A black and white illustration of two women in traditional Japanese attire. One woman is kneeling on the left, looking towards the other. The second woman is seated on the right, holding a small object. Several paper airplanes are flying in the air between them. A small rectangular object lies on the floor between the two women.

正しく素問の運を傳はんと
 する年の主年を算しを助考
 すれば必ずしも多岐早算を要
 わり易く算易の所ありされば
 算易に入るよりも安んずる
 算易とも危くはしと知る一不
 文のつぎで七算送るは七算は
 生の素算を算しすれば必ずハ
 供養をせざるやとびりやとに

いんそとをいへ
 ちあひ
 自習と書道新
 ぶん
 文筆を
 とむ
 文筆を
 つぎ
 具書と書道新

つづき年の星をみ入
りていふにあらはし

女訓照月次

正月 臘月初月 臘月
元月 亥の初月 亥の初月
子年 丑の初月 丑の初月
丑年 寅の初月 寅の初月
寅年 卯の初月 卯の初月
卯年 辰の初月 辰の初月
辰年 巳の初月 巳の初月
巳年 午の初月 午の初月
午年 未の初月 未の初月
未年 申の初月 申の初月
申年 酉の初月 酉の初月
酉年 戌の初月 戌の初月
戌年 亥の初月 亥の初月
亥年 子の初月 子の初月

初ふ文

人ふ倫なり是は親
子夫婦兄弟朋友の
みにあひあひする
家来礼儀を礼は
けらるる

補ひ百星をみ入
りていふにあらはし
子年 丑の初月 丑の初月
丑年 寅の初月 寅の初月
寅年 卯の初月 卯の初月
卯年 辰の初月 辰の初月
辰年 巳の初月 巳の初月
巳年 午の初月 午の初月
午年 未の初月 未の初月
未年 申の初月 申の初月
申年 酉の初月 酉の初月
酉年 戌の初月 戌の初月
戌年 亥の初月 亥の初月
亥年 子の初月 子の初月

憐れとすも家来は
君ふ礼儀を盡して私
なく親ら子に
海の子に親を
あひあひする

まじ
 勢とこれども入ぬ七女は
 ともふお忍のこころを
 又今日十日 お忍もあまのひ 懐妊性程と
 十日 あまのひ 不所 運秋 とくしき 日
 今日今日 あまのひ 産 うまひ きののこ
 母 お母 一ハ廿日 ふけ 産 うまひ 廿一日 ふけ 産
 一 えん 夕 ふけ 産 うまひ 廿一日 ふけ 産
 我 えん 軍 ふけ 部 うまひ 産 うまひ 廿一日 ふけ 産
 け ふけ き うまひ け うまひ 大 うまひ 女 うまひ 女 うまひ 女 うまひ

男のといふ武甕槌今津持
を今八軍邦老麻呂事々の
南はこもて野女に面との後腰を
叩きこもて我軍邦老麻呂は首を
注ぎきをかた功の老印を
切せしとては唐丸老一切を
東前ハ諸事をひ事中南貴
後をわたり今月を三日まで
法皇の人をさく史記でも我
縣の隣国と云わさへおのる
正月恒長の津らす月の夜男端
次は月女端より事此男女
く咽を集事終の夜咽と云
終をまむむ終を咽と云れ
むし中あとのありたるあり
ナをむと云えとて七月は中元
大月より元をさくおはは
市仲家分家生をさくおはは

なほひ環球は乃先王
六甲論人倫の道義
教らるゝ成好被此
大臣を以て説いて
六諭新義と号し救生

せん せん
先生は此の本を来りて
おもひ
いまだこれを知り
ぞく
俗の耳に入るゝ事
なり
へき
かたし
あつち
なれど
さう
あつち

六月のあつちのふゆも
 七月のあつちのふゆも
 八月のあつちのふゆも
 九月のあつちのふゆも
 十月のあつちのふゆも
 十一月のあつちのふゆも
 十二月のあつちのふゆも

[illegible]

秋^{あき}もさる人量^{ひとりかた}は風故^{ふうこ}
 日の^ひもさる夫^そ乃^{なり}子^こ
 君子^{くんし}乃^{なり}國^{くに}と稱^{なづ}せ
 とさるやいづれ
 乃^{なり}もそれの廣^{ひろ}く量^{りか}

わが世に帝
王ありも
かなも
正
なり

如月 亥月 梅見月

[illegible]

ともひつね助と佛
 道をもく先祖の
 公の沙提はともひく
 ともひつね助と佛

A black and white illustration of two men in traditional Chinese attire working in a field. One man is standing and holding a basket, while the other is kneeling and using a long pole to plant seedlings in the soil. The background shows a simple thatched hut and trees.

このう
 種を二日ハハハ水圓
 江戸ハ王子指馬を弁一と
 宵氣お日多彦おびじこの
 申書目録やく宵氣勅使を
 二日ハハハ知魚之七日ナ日
 まる通宗義の種を種な
 八月夜半の時ハハ九日より
 十五日まで中夜の種を中夜
 中夜を種を種を種を種を

肩うきよをもまれうきひがまうき好き栗りん
 偏うきよと平うきひふ三うき乃き乃りん破りん璃りん
 肩うき肘ひぢとうきもうきてうきまうき無うき義うき義うきふ
 族うきありうき平うき先うき文うき学うき此うき
 足うきさうきらうきにうき似うきるうき何うきれうきのうき

[illegible]

公は御控を背く
罪人となること
加賀赤松女官氏の文
同氏乃廿二日
そとに勉め奉る

上巳の節後儀杭の山に於て
 男女と書はあやまりかれ
 儀にあやまりあやまり
 ともかくもさへさへ
 三月の月をさへさへ
 四月の月をさへさへ
 五月の月をさへさへ
 六月の月をさへさへ
 七月の月をさへさへ
 八月の月をさへさへ
 九月の月をさへさへ
 十月の月をさへさへ
 十一月の月をさへさへ
 十二月の月をさへさへ

上巳の節後儀杭の山に於て
 男女と書はあやまりかれ
 儀にあやまりあやまり
 ともかくもさへさへ
 三月の月をさへさへ
 四月の月をさへさへ
 五月の月をさへさへ
 六月の月をさへさへ
 七月の月をさへさへ
 八月の月をさへさへ
 九月の月をさへさへ
 十月の月をさへさへ
 十一月の月をさへさへ
 十二月の月をさへさへ

男に口氏あやめ女も
 亦然里士ハ机もさる
 世も迷ふも伐く静
 澄成行治世共養を
 禁で賊と誅しあ

氏とあ堵をさへ
 文武をさへ治乱
 處し終る見不迫
 ともにさへさへ
 万々三民のさへ

女むすめもさるゝのハ風俗ふうぞく
 媛ひめ貌かたち之居振舞ふるまひ
 と辞ことばを啼なげ人柄ひとがら
 好よくあそべノ形態かたち乃なり

嬋娜あどろ々々ととと好このむべくべ
 怪き氣きの心こころを身みの
 懐なごふふ戎えい毎まいへ丈さかふ心こころ
 地え差さをわくくく相あ懐なごふ
 時とき々と々と第一だいいち不ふ倦けん



あつと云十六日 先づみとく
三つ子の鬼子母邦へまゐりの
事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
十七日 世の目より世の目より
帝の御弟の御弟の御弟の御弟
の事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
わく大所の目より世の目より
世の目より世の目より世の目より
あつと云十六日 先づみとく
三つ子の鬼子母邦へまゐりの
事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
十七日 世の目より世の目より
帝の御弟の御弟の御弟の御弟
の事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
わく大所の目より世の目より
世の目より世の目より世の目より

とて先難わる海
財金と惜む男姑
丈小先きも貞列の
探西くつるも古
あど女とていふも
あど女とていふも

あつと云十六日 先づみとく
三つ子の鬼子母邦へまゐりの
事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
十七日 世の目より世の目より
帝の御弟の御弟の御弟の御弟
の事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
わく大所の目より世の目より
世の目より世の目より世の目より
あつと云十六日 先づみとく
三つ子の鬼子母邦へまゐりの
事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
十七日 世の目より世の目より
帝の御弟の御弟の御弟の御弟
の事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
わく大所の目より世の目より
世の目より世の目より世の目より

あつと云十六日 先づみとく
三つ子の鬼子母邦へまゐりの
事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
十七日 世の目より世の目より
帝の御弟の御弟の御弟の御弟
の事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
わく大所の目より世の目より
世の目より世の目より世の目より
あつと云十六日 先づみとく
三つ子の鬼子母邦へまゐりの
事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
十七日 世の目より世の目より
帝の御弟の御弟の御弟の御弟
の事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
わく大所の目より世の目より
世の目より世の目より世の目より

金銭の利を積む者
業を必す下にする工
高の事と知り女たるを
極小にせんと欲する

かゝる宣へるの聞は
善教も是より
治るる都のれ
才子なる人の
至はる武士と

七ノ月 天の川旁にありて星の
 七ノ月 星の川にありて星の
 七ノ月 星の川にありて星の
 七ノ月 星の川にありて星の
 七ノ月 星の川にありて星の
 七ノ月 星の川にありて星の
 七ノ月 星の川にありて星の
 七ノ月 星の川にありて星の
 七ノ月 星の川にありて星の
 七ノ月 星の川にありて星の

何事も如く
 賢の如く
 賢の如く
 賢の如く
 賢の如く
 賢の如く
 賢の如く
 賢の如く
 賢の如く
 賢の如く



七ノ月 天の川旁にありて星の
 七ノ月 星の川にありて星の
 七ノ月 星の川にありて星の
 七ノ月 星の川にありて星の
 七ノ月 星の川にありて星の
 七ノ月 星の川にありて星の
 七ノ月 星の川にありて星の
 七ノ月 星の川にありて星の
 七ノ月 星の川にありて星の
 七ノ月 星の川にありて星の

官の如く
 官の如く
 官の如く
 官の如く
 官の如く
 官の如く
 官の如く
 官の如く
 官の如く
 官の如く

ちかすあをいさひの月
 まをいさひの月十八日
 月廿日の夜に実中
 二十三日とす
 常成徳成
 月廿日の夜に実中
 常成徳成
 月廿日の夜に実中
 常成徳成

仙乃此法を禁する
 わるき世に
 今此へ
 世の救生を
 緯と痛漢

この世に
 仙乃此法を禁する
 わるき世に
 今此へ



仙乃此法を禁する
 わるき世に
 今此へ
 世の救生を
 緯と痛漢

かろ^{まどひ}熱^{あつ}を病^{やとけ}も^ひの
道^ちふ^ちあ^ちく^ちま^ちの^ちわ^ち
秘^ひ金^{きん}布^ふ乃^な乃^な場^ばふ
説^せ法^{ぽう}ぢ^ちの^ち頑^{がん}ふ^ふ器^き城^{じやう}
を^を守^しふ^ふあ^あの^のち^ち

生類處を均るにを
かんた好御も実
祇園提女七情の
教解
此怒哀楽是也

井田宗大己貴命は桓武天皇の代平親王の門下を食せし後多に移りて五二十日建仁寺に在りて其の宗を弘め入道の命を授けられしに
 一、此の寺は其の宗を弘められしに
 二、此の寺は其の宗を弘められしに
 三、此の寺は其の宗を弘められしに
 四、此の寺は其の宗を弘められしに
 五、此の寺は其の宗を弘められしに
 六、此の寺は其の宗を弘められしに
 七、此の寺は其の宗を弘められしに
 八、此の寺は其の宗を弘められしに
 九、此の寺は其の宗を弘められしに
 十、此の寺は其の宗を弘められしに

傍の人お思はるるを
 わるるに
 遷す生別死あり
 哀れ花散るるを
 も家にも有るるを



ねど是哀でやあり
 可也と云ふはれ
 為といふはれ
 うと云ひありと思ふ
 人の云ふはれと云ふ

非^ひもか^かく^く何^なと
 非^ひは^は是^{これ}國^{くに}實^{じつ}情^{じやう}願^{げん}の
 私^{そく}と^とあ^ある^るの^の利^りを^をえ
 て^て石^{いし}義^ぎ非^ひ法^{ぽう}乃^の死^し
 別^{べつ}れ^れ交^{かう}用^{よう}者^{しや}を^を免^{めん}と

子^この^のん^ん丈^{ぢやう}の^の七^{しち}情^{じやう}ハ
 熱^{あつ}く^くか^かれ^れど^ど一^い人^{にん}も
 怒^いり^りあ^あま^まさ^さく^く七^{しち}情^{じやう}
 一^いつ^つも^も欠^くる^る人^{にん}は^はひ^ひど^ど
 望^{ぞう}む^む公^{こう}お^お怒^いく^く一^い人^{にん}の

まさか廣くあつたれば悲し
 とけりとも一とせのあはれを
 あはし女児の役をいぬや
 新娘あはれにあられたるの
 勢くちをいひまわつた思ひ
 まあればあつた思ひをいふ
 そろそろに唯あつた思ひ
 まあつた思ひをいふ
 恨あつた思ひをいふ

女部世幸後

女児のそとあつた思ひの中
 懐妊十月の思ひ具のうへ
 まあつた思ひをいふ
 かやうに月あつた思ひをいふ
 とあつた思ひをいふ
 あんやふ思ひをいふ

まさかとも因縁拙く女
 生れ死にまを思ふ
 いま思ふあつた思ひ
 乃とあつた思ひ
 長根もあつた思ひ



いんぞ独居あつた思ひ
 一人とあつた思ひ
 初とあつた思ひ
 まあつた思ひ
 風あつた思ひ
 あつた思ひ
 恨あつた思ひ

業成滅せんあつた思ひ
 恨あつた思ひ
 まあつた思ひ
 悔の思ひあつた思ひ
 あつた思ひ

お八重は春の日のけしの氣味を
 のびと愛おしく一升を合とて
 母の居るの帳下をまわつて
 ねえこれいふとさうして
 舒暢くいひてゐる初めの
 十月めは果樹ふふ熟する
 やとてうふふは附き合
 風ふあつてあつてり
 雨ふあつてあつてり
 除きとてあつてり
 やつてあつてり
 うふふもあつてり
 △醫書ふ病を治す
 婦人の病は男の病は
 十の九は
 一の三は
 唯凡そ
 思ひ合ふ

及油丸はあつて
 万世に羈絆
 一日一夜八倍に
 一毛も
 皆と
 時

△婦人の月信は三十日
 多めは
 少めは
 不順は

虚く明く
 静人と
 累々六塵の
 弛心
 枝也

七十七
 七十八
 七十九
 八十
 八十一
 八十二
 八十三
 八十四
 八十五
 八十六
 八十七
 八十八
 八十九
 九十
 九十一
 九十二
 九十三
 九十四
 九十五
 九十六
 九十七
 九十八
 九十九
 一百

七十七
 七十八
 七十九
 八十
 八十一
 八十二
 八十三
 八十四
 八十五
 八十六
 八十七
 八十八
 八十九
 九十
 九十一
 九十二
 九十三
 九十四
 九十五
 九十六
 九十七
 九十八
 九十九
 一百

七十七
 七十八
 七十九
 八十
 八十一
 八十二
 八十三
 八十四
 八十五
 八十六
 八十七
 八十八
 八十九
 九十
 九十一
 九十二
 九十三
 九十四
 九十五
 九十六
 九十七
 九十八
 九十九
 一百

七十七
 七十八
 七十九
 八十
 八十一
 八十二
 八十三
 八十四
 八十五
 八十六
 八十七
 八十八
 八十九
 九十
 九十一
 九十二
 九十三
 九十四
 九十五
 九十六
 九十七
 九十八
 九十九
 一百

文政六壬午季秋

日本橋通吉町目

須永屋茂吉

通吉町

鶴屋茂吉

本町十軒店

英平吉

日本橋通吉町目

小林新吉

樂天堂法藤了翁

花書